

再エネ発電設備の適切な導入及び管理のあり方に関する検討会 第4回会合

東京大学 松本 真由美

2022年6月6日提出

本検討会では、ヒアリングの機会をつくっていただき、事務局のアレンジありがとうございます。本日、所用で会議に出席できないため、意見を提出します。

- ① 今回の検討会のメインスコープは太陽光発電だと思うが、その他電源についても課題が生じたら機動的に対応していく旨をとりまとめに盛り込むべきではないか。特に、小形風力発電の管理や廃棄の問題、洋上を含む大型風車のトラブルなども今後生じるのではないかと懸念している。
- ② 太陽光パネルの廃棄について、足下では住宅用パネルの処理に関して誰に相談すれば良いかわからず困っているといった声も聞かれる。住宅用太陽光の所有者等への周知など必要な対応を検討すべきではないか。
- ③ これまで議論したような措置について適切に運用しようとする場合、執行力・執行体制の強化が不可欠である。人員の増強は簡単ではないが、デジタル化や新しい技術などを通じて効率的な執行についても検討してもらいたい。
- ④ 洋上風力発電の立地地域において、地域住民や自然保護団体から意見や要望が寄せられており、以下に示す。こうした全国の悩みの声は重要であり、論点整理を委員会の議論の中でしっかりしたうえで、パブリックコメントなどをかけてお声を丁寧に聞いてほしい。

立地地域の市民グループからのご意見

- 一級河川の最下流部右岸に広がる台地での風車を建設する事業について、事業者の風車の影に係る海外ガイドラインの不遵守による住民への健康被害、地域住民等との不十分な相互理解、日本有数の渡り鳥の渡りのルートが守られない懸念などから、事業者・行政への事業再考を求めている。
- 県沿岸の美しい松原のほとんどが飛砂防備保安林に指定され、古いものは江戸時代から植林が続けられ現在の松原になったが、県は、その松原への風車建設を推進し保安林解除を進めた結果、砂防林の機能が一部喪失して暴風による農業被害が発生する状況になっている。
- 現在、港湾区域内洋上風力発電事業の基礎杭工事が完了し、今後タワーを含む上部工作物の設置工事が予定されているが、基礎杭工事が施工された際には、事前連絡が無く突然打設音が周辺に鳴り響き、市役所に苦情が殺到し、地元新聞も大きく報道した。モノパイルの打設音が心配である。

- 地域協議会の構成員として、海域の漁業関係者は、構成員として選出されているが、内水面漁業関係者は、構成員として選出されていない。風車建設で魚の遡上が止まると死活問題になると関係者は憂えている。
- 一般海域における風力発電事業者は、当初の事業説明会において事業終了時には、基礎杭（モノパイル）を含め完全に撤去すると説明していたが、国がモノパイルの海底部分は存置するのやむを得ないと方針を 180 度転換することになり、その後の事業説明会で事業者は、撤去方法についての説明を拒んでおり、地域住民は心配している。

自然保護団体からのご意見

- 風力発電施設の立地は鳥類の重要生息地や飛翔経路と重なることが多く、これまでに建設された風車によって県内ではバードストライクや渡り経路の変更等が確認されており、営巣地放棄などの負の影響も懸念されている。今後も県内外には膨大な数の洋上及び陸上の大規模事業が計画されており、そのほとんどが希少種の繁殖地や主要な渡り経路と重なっている。これらがそのまま実現すると鳥類に対する影響は甚大なものになり、国際的な渡りルート維持ができなくなるだけでなく、最悪の場合、種の存続にも影響しかねないと危惧している。生態系保護観点からの議論が十分ではなく、生態系の維持が確保できるような仕組みの設計が必要と考える。生態系の観点からヒアリングの場を設けてほしい。

以上